

信州大学大学院
総合人文社会科学研究科
人間文化学分野
修士論文要旨集

令和6（2024）年度版

目 次

五十音図に関する研究

—「五音」の成立から「五十音」へ—

小林 智樹（日本語学領域）

..... 1

宮沢賢治の農民芸術観

—童話を参照軸に—

玉田 梨々花（比較文学領域）

..... 2

美術館における包摂・連携と現代美術

—文化芸術の手段化批判を超えて—

中野 多恵（芸術コミュニケーション領域）

..... 4

中原中也と 19 世紀フランスの詩人たち

—ネルヴァルとラフォルグの受容を中心に—

西宮 丈樹（比較文学領域）

..... 6

現代ドイツ社会における反ユダヤ主義とその背景

和田 真歩（ドイツ語学・ドイツ文学領域）

..... 7

修士学位論文等要旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専攻名／Department 総合人文社会科学専攻
分野名／Division 人間文化学分野
学籍番号／Student ID 22UA103K
氏名／Name 小林 智樹

論文等題目／Title

五十音図に関する研究
—「五音」の成立から「五十音」へ—

論文等要旨／Abstract

五十音図の成立については、従来「悉曇から出た」「漢字反切から出た」などの起源論が多く行われた。本稿はこの起源論を展開し、また従来ほとんど議論がなかった「音節に関わる認識」の側面に着目して音図の成立過程を考えた。また、具体的資料として『孔雀経音義』掲載の音図を取り上げ、資料を音図成立過程の中に位置づけようと試みた。

起源論については、従来「悉曇から出た」「漢字反切から出た」という二説があり、馬淵和夫氏はその両説を立てて悉曇学と漢字音韻学の二方面から音図が成立したと主張したが、二方面から音図が成立する具体的過程は説明していなかった。本稿はその点を詳しく検討し、二元的な捉え方は有効だが、二方面の違いは「悉曇学」「漢字音韻学」という学問領域の問題ではなく「悉曇順」「配列不定」という配列の問題であることを指摘した。

音節に関わる認識論については、「母音」「子音」の認識の形成過程について、音節同士の同母音、同子音の認識を素地として音図を作る中で「母音一覧」が実現し、その後「子音一覧」が実現したという過程を推定した。ここから、成立期の音図は「母音一覧」＝「五音」を単位としてその集合として捉えられており、現在の「五十音」とは異なる認識であったことを指摘した。また、「音節一覧」の認識について、その認識は音図の原理に基づいて実現したと考えられるが、音図が「五音」の集合として認識された当時は音図が含む重複音節を取り除くことができず、また音図の配列も一定でなかったため、音図とは異なる音節一覧装置として「いろは」のような誦文が作られたと推定した。

個別資料の『孔雀経音義』巻末の音図については、個人のメモ書きのようなもので未完成性の側面を指摘できるが、その未完成性ゆえに、成立期の音図の特徴を色濃く反映したものであることを指摘した。

信州大学大学院総合人文社会科学研究科

修 士 学 位 論 文 等 要 旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis	
専 攻 名／Department	総合人文社会科学専攻
分 野 名／Division	人間文化学分野
学籍番号／Student ID	23UA102E
氏 名／Name	玉田梨々花
論文等題目／Title	
宮沢賢治の農民芸術観 ——童話を参照軸に——	
論文等要旨／Abstract	
本稿は、宮沢賢治(1896 年~1933 年)が 1926 年に書いた「農民芸術概論綱要」(以下、「綱要」)の全 10 章 99 行を、一行ずつ注釈を施す形で読解するものである。第 10 章目の結論を除いて、各章に童話一編を割り当てて比較検討した。「綱要」結論に童話を割り当てなかった理由は、その章だけが 6 行と短く、それに童話を当てがうと解釈が恣意的になりかねず、むしろ第 9 章までに取り上げた童話をもう一度再考する方が、各章の一貫性を証明できると考えたためである。 賢治の農民芸術論に着目する理由は、賢治という人間、その生涯を貫く最大のコンプレックスにして、近縁思想にはない特徴である「資産家に生まれたがために農民に仲間入りできなかった」という想いが、農民芸術論にこそ表れているからである。 中でも「綱要」本文評釈に取り組む理由は、従来の農民芸術研究では、本文の背後に想定される思想や、賢治の実践的活動について究明されてきており、それらが表出された文章「綱要」が読解される機会が少なかったためである。 また、「綱要」本文評釈に当たって賢治の童話を参照する利点は二つある。一つめは、童話は詩よりも「子どもに理解してもらおう」という作者の配慮があるために、例えば「四次芸術」などの一見難解な語も理解しやすく説かれていることにある。また、賢治の童話は詩よりも登場人物が多く、色とりどりの会話とともに物語が進行していく。因果関係を明らかにするためには、童話という起承転結のある物語を参照するのが効果的である。 もう一つは、これまで日本の近代文学研究で往々にして採られてきた、作者への理解を深めるために、同一作家による異なるテキストスタイルの作品を比較検討するという研究方法(例えば、谷崎潤一郎『文章読本』と「春琴抄」の比較研究)を、宮沢賢治研究において行う新規性である。本研究は、宮沢賢治においても他の作家と同様に理論的文章と物語的作品の比較検討が可能であることを証明したいと考えている。 その成果として、賢治は実際、自身の出自が農民ではないからこそ、外部から農民を観察できたし、農民の仲間入りを願いもしたと考え至った。宮沢賢治の農民芸術観とは、彼の疎外	

感への抗いであり、農民の仲間入りの願いである。本稿は、この視点を「綱要」と 9 つの童話の本文に見出すことに成功した。今後の課題は、彼のこの心情を彼の他の作品本文にも発掘していくことである。

信州大学大学院総合人文社会科学研究科

修士学位論文等要旨

Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis	専攻名／Department	総合人文社会科学専攻
	分野名／Division	人間文化学分野
	学籍番号／Student ID	23UA103C
	氏名／Name	中野 多恵

論文等題目／Title
美術館における包摂・連携と現代美術 ——文化芸術の手段化批判を超えて——

論文等要旨／Abstract
現在、文化芸術や博物館において、包摂、つまりアクセシビリティを高め全ての人が平等に活動・利用できることや、連携、つまり観光やまちづくり、国際交流など、関連分野と協働することが重視されている。このことは、文化芸術基本法（2017年改正）の中にも見られる。 美術館においては、包摂や連携を主に担う教育普及活動の意義が増し、その充実や展開が図られている。たとえば、障がいのある人の鑑賞への配慮や、地域の学校へ通う子どもたちへ向けたプログラムは、多くの美術館において行われている。その端的な方向性は、従来の視覚中心主義的な鑑賞・教育の相対化、対話・協働の重視である。そこにはアーティストも関わり、美術館の活動を支えている。 しかし、包摂や連携の重視を明確に示した文化芸術基本法には、批判的な意見もある。その一つは、文化芸術がその本質から逸れ、社会的要請に応えるために利用されているという「手段化批判」である。 「手段化批判」の背景にある文化芸術の本質主義/手段主義の二項対立を乗り越えるために、様々な先行研究が行われてきた。たとえば、ホールデン（John Holden）による3つの文化の価値（本質的価値、手段的価値、共同体的価値）の提案、近年の日本においては菅井薫による博物館での福祉的実践に関する研究が挙げられる。 一方、文化芸術において包摂と連携の考え方は、その歴史や具体的な実践の中にも見出すことができる。たとえば、現代美術においては包摂や連携の要素を制作過程や作品の内部に取り入れてきた経緯がある。具体的には、1960年代以降の芸術実践を挙げることができ、2000年代以降国際的に見られるようになったリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートは密に関係する。つまり、アーティストによる美術館の教育普及活動への参与にも、芸術の手段化以上の契機と動機があるのである。 包摂や連携を内包してきた現代美術は、今日の美術館の機能と親和的であり、だからこそ社会的要請とは別の次元で、現代美術と美術館は協働することができる。本論文ではこ

のことを、具体的な美術館の活動やアーティストの作品/ 実践、そして美術館の学芸員やアーティストへのインタビュー調査の結果を元に、論証する。

信州大学大学院総合人文社会科学研究科

修 士 学 位 論 文 等 要 旨
Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis

専 攻 名／Department 総合人文社会科学専攻

分 野 名／Division 人間文化学分野

学籍番号／Student ID 23UA104A

氏 名／Name 西宮丈樹

論文等題目／Title

中原中也と 19 世紀フランスの詩人たち
ーネルヴァルとラフォルグの受容を中心にー

論文等要旨／Abstract

中原中也については、比較文学の分野でもこれまで盛んに論じられてきた。しかし、その比較対象はヴェルレーヌやランボーに偏り過ぎていたきらいがあるのではないか。このような問題意識から、本研究では、まだほとんど論じられていない中原によるネルヴァルおよびラフォルグの受容について検討する。

ネルヴァルについて、まずは日記や書簡における記述を参照して、中原がネルヴァルの発狂を相対化し、自己の精神的危機を乗り越える糧にしていく様子を確認する。また、1929 年の 5 篇の詩の翻訳の裏に、ネルヴァルに対する基本的な共感を見出し、訳詩の分析によって、中原の関心が天上と地上の二元的世界観と女性の「死」に向いていることを明らかにする。そして、そこから発展して、「いのちの声」の「空の歌」と「セレナード」の「空の合唱隊」に中原の「空」に対する希求が込められていることを明らかにする。

また、ラフォルグについては、中原の詩「骨」や『表象派の文学運動』に引用された「ハムレット」を通じて、「死」に対する向き合い方の中に両者の類似を探索。さらに、中原とラフォルグの文体を比較し、破調や不調和に特徴があることを確認するとともに、「月」や「ピエロ」といった主題の扱い方に一定の共通点と相違点が見出せるところまでを明らかにする。

最終的に、これまで等閑視されてきた中原のネルヴァル、ラフォルグ受容の研究可能性を提示することを目指す。

修士学位論文等要旨

Abstract of Master's Dissertation or Selected Topical Research

論文提出者／The person who submits a thesis	専攻名／Department	総合人文社会科学専攻
	分野名／Division	人間文化学分野
	学籍番号／Student ID	23UA105K
	氏名／Name	和田真歩
論文等題目／Title		
現代ドイツ社会における反ユダヤ主義とその背景		
論文等要旨／Abstract		
反ユダヤ主義はドイツ連邦共和国に今日も存在している。特に、近年は「輸入された反ユダヤ主義」が問題となっている。この言葉はしばしばメディアで用いられ、ドイツへ流入する移民や難民が反ユダヤ主義を増大させていることを暗に示している。これは反ユダヤ主義だけではなく、移民問題とも関連する問題である。 本稿ではまず、今日に至るまでの反ユダヤ主義の発展をたどり、次に「輸入された反ユダヤ主義」の意義を分析した。最後に、輸入反ユダヤ主義の問題化過程を示した。 2015年のヨーロッパにおける難民危機以降、輸入反ユダヤ主義という言葉はアラブ難民の反ユダヤ主義を指す言葉として定着した。この言葉は、中東紛争や中東情勢に強く特徴づけられた反ユダヤ主義現象を指している。中東からの難民はこうした状況を内面化しているとされ、それゆえに反ユダヤ主義に陥りやすいと考えられる。 ドイツのユダヤ人社会は、難民危機以前からイスラム系移民の反ユダヤ主義に不満を抱いてきた。輸入された反ユダヤ主義という言葉が定着したのはこのためである。さらに、輸入された反ユダヤ主義は AfD によって移民問題と強く結びつけられた。		

信州大学大学院総合人文社会科学研究科

信州大学大学院総合人文社会科学研究科人間文化学分野
修士論文要旨集
令和6（2024）年度版

令和7（2025）年3月31日 発行

編集・発行 信州大学大学院総合人文社会科学研究科人間文化学分野
〒390-8621 長野県松本市旭 3 丁目 1 番 1 号
信州大学大学院総合人文社会科学研究科人間文化学分野内